

経営と健康



日本史を彩った女性たち 第九回

「武将の愛した女性たち」

講談師 一龍齋貞花

紫式部も本妻でなく妾であった。戦国時代は後継者をもうけることと、多くの子ども産ませ他家へ養子に。そして嫁がせ姻戚関係を広めることにあった。側室を持つのは当たり前でした。

平清盛の愛した女性

絶世の美女といわれた常盤御前。源義朝の寵愛をうけ今若、乙若、牛若（義経）を出産。義朝が清盛に敗れるや、「何卒子どもお助け下さい」と清盛の元へ。常盤の色香に迷い側室にして三人を助命、清盛の女子を産んだものの清盛の愛が薄れ一条大藏卿藤原長成に嫁ぎ数人の子を産んだといわれる。

殺すべき頼朝も、義母池の禪尼が「死んだ我が子に似ています。何卒ご助命を」と言われ助けたとも。女性の頼みを受け入れ頼朝、義経を助命したこと

が平家滅亡の原因に。

祇王、祇女白拍子の姉妹も清盛が心変わり、姉妹は京都嵯峨野の祇王寺で尼になる。正室の時子は夫を助け清盛没後剃髪し二位の尼、平家が敗れるや幼い安徳天皇を抱いて三種の神器と共に海中に身を投じた。これがため神器を奪えなかったことも、頼朝が義経を許さぬ原因の一つになった。

源頼朝の愛した女性

清盛から信頼され、伊豆に流罪された頼朝の監視役伊豆の豪族伊東祐親の娘八重姫。父が大番役として上洛している間に頼朝と相愛となり千鶴丸を出産。帰った祐親は平家の怒りを恐れ、千鶴丸を川に沈めて殺害。八重姫は江間小四郎に嫁がせられたが、八重姫は心の中で頼朝を想い慕っていた。頼朝と

て同じ一番愛したのは八重姫です。

後に祐親は自害に追い込まれ、父祐泰の仇工藤祐教を討ち、五郎時致が頼朝の狩屋に荒れ込み、「おのおれおじい様の仇頼朝に二太刀」おなじみ曾我兄弟の仇討ち。

北条政子が頼朝の元に走り結婚、妾を持つのが当たり前時代にもかかわらず、頼朝の愛人の家を叩きこわすほど強い女性。しかしそれだけ頼朝を愛していたともいえますよう。

源義経の愛した女性

義経が壇の浦で平家を滅し喜んだ後白河法皇は、都でとうたわれた白拍子静を与え二人は相思相愛となり、頼朝は法皇から勝手に妾を貰うとはけしからんと、川越重頼の娘八重姫を正室として嫁がせます。この時行列を組んで京

都の義経の元へ行ったのが上流社会の花嫁行列の第一号。義経はあくまでも静を愛していました。雪の吉野山で静との別れは涙を誘います。八重姫は落ち行く義経の元へ駆けつけ、それまで余り愛情を感じなかったものの駆けつけてくれたことで愛情を覚え、最後まで行動を共にしています。矢張り本妻ということですね。

武田信玄の愛した女性

左大臣三条公頼の娘で今川義元の媒酌で同い歳の三条夫人と結婚。都育ちの三条夫人は「こんな山の中は嫌だ嫌だ」と愚痴をこぼしていたというが、夫人のお墓のあるお寺へ行ったら夫人の手紙が残されており、それを読むと決して仲は悪くなかったことが伺われる。長男優秀な義信を出産。一方宿敵名家諏訪

頼重を倒すや信玄は美貌の諏訪姫に心を動かされたが、佐久の豪族彌津元直の娘美佐姫を側室にしたばかりだった。

是非諏訪姫をといて信玄に対し、重臣たちは諏訪家の娘とあつて「もし寝首でもかかれては大変」と反対。すると山本勘助が、「諏訪の姫との間に御子が出来れば、その子によって諏訪家を立てよう」と願うは必定。されば名家諏訪衆は譜代同様になりましょう」心配もあつたのだから侍女が姫の身体を改め護身の短刀も取り上げたという。やがて諏訪御料人の産んだ勝頼が諏訪家を継いだばかりか、優秀な長男義信は意見を違え切腹させられ、次男は盲目とあつて勇猛な勝頼が後継者に。諏訪姫は勝頼九歳の時うつ病で諏訪湖投身とも、胸の患いともいうが死去。父の仇の側室となつた薄幸の美人とどんどん美化されていったのです。仁科五郎盛信（長野県歌信濃の国では信盛と歌われている）母は信玄の側室油川婦人、信濃国安曇の仁科の名跡を継ぎ高遠城主となり、織田信忠率いる5万の大軍に包囲され、家来たち「落ちて下さい」と進言するも、「私は信玄の子である」と26歳の若さで最後まで戦い抜き信長をして「花と散らせてやれ」と感服させた盛信。領民にも慕わ

れ私もこの講談を作るべくお墓にお参りましたが花が供えられていた。もし盛信が武田家を継いでいたら、最後迄逃げ廻っていた勝頼と違い武田家の命運も違ったものになったであろうが、若年であつたためそして名家を継いだ勝頼が後継として大働きもしたため後継者になれなかつた。油川夫人がいい母親であつたのでしよう。側室にも違いはあるが、矢張り多くの側室を持ち後継者をつくるのが家存続の形でした。側室どころか本妻も持たなかつた上杉謙信との違いである。

織田信長の愛した女性たち

長男信忠、次男信雄、長女五徳（徳姫）を生んだ吉乃を側室とする向きもあるが、「武功夜話」でも記されている通り、小牧山城で家来に正式に披露しているところから妻であると思う。

桶狭間合戦の時信長に支援した生駒八右衛門の妹で出戻り、信長が生駒家を訪れた時見初めたといわれ、母に冷たくされ母性愛に飢える信長を温かく包んでくれる女性であつたという。吉乃が亡くなるや信長は新年の祝賀の行事を取りやめ毎日小牧山城から吉乃のお墓のある小折（愛知県江南市）の九昌寺の方角を見やつては涙をながして吉乃

の死を悲しんだという。いかに愛していたかがわかります。吉乃のお墓も小牧山に向き建てられています。本妻とされる濃姫（帰蝶）が嫁ぐ時、父の斎藤道三が「いざの時にはこれで」と短刀を渡したといわれることでも政略結婚であることがわかる。二妻七妾と言われる中で吉乃死後特に愛したのがお鍋。近江の土豪高畑氏の娘で近江八幡城主小倉実澄の妻だったが、夫が戦死するや信長を頼つてきて側室になり、吉乃の面影に似ていたとか、優しい女性だつたとか伝えられ、信長・信忠の廟所岐阜の崇福寺にお鍋の切紙（書状）があり。

それには「崇福寺は信長公の墓所ですから、たとえいかなる者が乱入しようともきつぱりはねつけなさいませ」と書かれている。信長が愛しただけのことはありますね。この切紙を拝見した時嬉しかったですね。

豊臣秀吉の愛した女性たち

犬（前田犬千代後の利家）と猿がおねねさん争い。犬千代は長男ではないといえ城主の倅、藤吉郎は足軽。選んだのが藤吉郎、後の出世を見通していたのか、なにしろ天下人秀吉と意見をたたかわせるほどのしつかり者。秀吉愛してい

るものの頭が上らない。おまけに主人信長の娘や、大名の姫など身分の高い女性好み。浅野長政を滅し妻のお市、信長の妹で美人、後家となつたので申し入れたが、兄の家来で夫を殺した秀吉を嫌つて三人の子を連れ柴田勝家と再婚。その勝家を倒し今度こそと思つたが、お市は夫勝家と共に死を選び三人の娘は秀吉の元へ。長女茶々（淀君）をくどき落し、念願のお市の娘歳の差もあり言いなり放題の可愛いがりよう。淀君は父長政、母お市の仇とあつて豊臣家滅亡を目論んでいたなどともいわれ我儘。その一方信長の弟信包の娘で宇喜田直家の側室お福。直家死後身をもつて秀吉を歓待。明智光秀との戦い前中国大返し途中姫路城で休息。お福の歓待を受け勇氣百倍。お福の子宇喜田秀家を養子にし五大老の一人に取り立てたのを見て、お福を愛していたかがわかります。奥州出陣中見初めた塩屋惟久の妻お島を、五日間ぶつ通して離さなかつた。此方は好色からでしようが、部下の妻を横取りはいけませんよ。

イヤ〜きりがありませんで紙数が足りなくなりました。家康、政宗も控えています。こういう話題は興味のおありの方が多くと思いますので、この続き次回のお楽しみに。